

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月10日現在

機関番号：32627

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820058

研究課題名（和文）台帳を中心とした天明から享和年間における江戸歌舞伎の研究

研究課題名（英文） The study of the scripts of Edo Kabuki  
from the Tenmei to the Kyowa era

研究代表者

光延 真哉 (MITSUNOBU SHINYA)

白百合女子大学・文学部・講師

研究者番号：70586388

研究成果の概要（和文）：

18世紀後半の歌舞伎作者の研究が空洞化してしまっている現状を受け、金井三笑の活動を軸にしながら、新出台帳を多く用いて当該期の江戸歌舞伎の具体相を明らかにするとともに、さらにそれが、続く化政期（1804～29）の四代目鶴屋南北にどのような影響を与えたかについての展望を示した。

研究成果の概要（英文）：

Under the existing circumstances of Kabuki studies, researching playwrights of the second half of the 18<sup>th</sup> century becomes hollow. Analyzing a lot of newly discovered scripts, this study focused on the activities of KANAI Sansyo, and revealed the specific situations of Edo Kabuki during this period, furthermore showed the view of how TSURUYA Nanboku IV was influenced by that in the next Kasei era(1804-29).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学、歌舞伎、江戸

## 1. 研究開始当初の背景

現在の歌舞伎研究において18世紀後半の江戸歌舞伎に関しては、代表的な役者についての論考はあっても、作品論や狂言作者（歌舞伎作者）論を主体とした本格的な研究は必ずしも盛んではない。続く化政期を代表とする四代目鶴屋南北に関する研究は数多いが、南北の登場の前提となるべき前の時代の作品研究、作者研究がほとんど顧みられていない状況にあると言える。

## 2. 研究の目的

現在の歌舞伎研究において空洞化してしまっている、天明（1781～88）・寛政（1789～1800）・享和（1801～03）年間の江戸歌舞伎について、現存台帳（台本）の書誌的な悉皆調査を行いつつ、二番目の世話狂言の独立の問題、作者による台帳の書き場の割り振りや添削の問題といった観点から台帳を分析することで、当該期の歌舞伎の具体相を明らか

にし、文化（1804～17）・文政（1818～29）期へと続く影響関係の様相をより明確に浮かび上がらせることを目的とする。

### 3. 研究の方法

天明から享和年間における江戸歌舞伎の台帳について、書き場の割り振りや添削の問題という観点から分析する。

### 4. 研究成果

以下、本研究の成果物である図書『江戸歌舞伎作者の研究 金井三笑から鶴屋南北へ』に収録した論考の概要を記す。

#### (1) 「金井三笑の事績 ―中村座との関わりを中心に―」

本稿では、狂言作者金井三笑の事績について、中村座との関わりを中心に考察した。金井半九郎と名乗った中村座の帳元出身の三笑は、二代目市川團十郎との親密な関係を利用し、作者業へと転向する。二度に渡って中村座の乗っ取りを謀った三笑であったが、いずれの計画も失敗に終わり、その度毎に中村座を追放される。しかし三笑は、座元の交代に乗じて、二度ともに中村座への復帰を果たす。三笑の父もまた、半九郎を名乗る中村座の手代であったが、この名は、初代中村伝九郎の「九郎」を譲り受けたものである。三笑が、中村座に固執したのは、中村座に所縁のある自身の出自を強く意識していたためと考えられる。

#### (2) 「市村座時代の金井三笑」

本稿では、三笑の最盛期である市村座時代の活動を考察した。役者不足の一座にあって、三笑は、襲名を効果的に利用しつつ、多くの役者を取り立てたほか、配役の上でも従来の役柄を転換させるという工夫を行った。三笑は、役者の魅力を効果的に引き出す才能があった作者と言える。この能力は、大一座の場合でも存分に発揮され、実と敵の仕内の組み合わせという作劇をも生む。このようにして、市川一門を抱える中村座と対等に渡り合った三笑は、名声を勝ち取り、権威ある作者として劇界に君臨したのである。

#### (3) 「金井三笑の狂言作者論 ―『神代摺・論』と『祝井風呂時雨傘』―」

洒落本『神代摺論』と、人情本『祝井風呂時雨傘』巻之五・第十回には、三笑についての記述が見られる。それらの記述を、他の資料での三笑への言及に照らし合わせながら検討すると、三笑が、作劇については、作品全体のメリハリや筋の分かり易さを重要視し、

作者の姿勢については、役者の我儘に従わずに常に新作を手掛けることによって作者の権威を守るべきと考えていたことが指摘できる。

#### (4) 「『卯しく存曾我』考」

三笑作の『卯しく存曾我』（寛政2年正月、市村座所演）の二番目の台帳には、既紹介の東京大学国語研究室蔵本のほかに、新紹介となる抱谷文庫蔵本が存在する。東大本は貸本屋大野屋惣兵衛の旧蔵書、そして抱谷文庫本は上演台帳に近いものであり、両者に共通する部分を比較すると、抱谷文庫本に見られる江戸歌舞伎の特徴、すなわち二番目に一番目との関連性を持たせるという要素が、東大本では意図的に削除されていることが分かる。このことから東大本は、江戸と上演慣習の異なる上方の狂言作者が、タネ本として所有していたものと考えられ、しかも、「七五三」の墨書があることなどから、それが具体的に奈河七五三助である可能性を指摘できる。また、内容の面において本作には、同時代風俗の摂取や頽廃美のある人物造型、丁寧な段取りや「毒」のあるおかしみといった点で、三笑の弟子の四代目鶴屋南北の作品につながる作劇術が認められる。なお、本成果物ではこの論考に関連させ、「資料編」に本台帳の活字翻刻を掲載した。

#### (5) 「江戸歌舞伎における台帳出版 ―初代瀬川如臯作『けいせい優曾我』をめぐって―」

初代瀬川如臯作、天明8年、桐座所演の『けいせい優曾我』には、花屋久治郎刊の根本が存在する。近世中期の江戸庶民は、歌舞伎を台帳という形式で享受することにあまり関心がなく、また、劇場も出版に関して大きな権限を持ったため、台帳の公刊は上方の絵入根本のように盛んではなかった。本根本は、こうした状況下で、既存の洒落本の形式を借り、波静と瀬川家の親交や、控櫓の桐座での上演作であったことなど様々な条件が揃って出版が叶った、極めて稀な例である。

#### (6) 「『春世界艶麗曾我』二番目後日考」

寛政3年2月、中村座所演の『春世界艶麗曾我』二番目後日の台帳が抱谷文庫に残る。この台帳は推敲段階のものであり、担当作者の初代増山金八や木村園次の筆跡が認められる。園次が執筆した中幕の台帳には、金八による添削の跡が確認でき、最終稿に至るまでの推敲の過程を具体的に示すものとして貴重である。また、内容の面では、序幕のとろろ汁によるおかしみの趣向が、十返舎一九作『東海道中膝栗毛』の鞠子宿の場面に先立つ

という点で注目できる。さらに、金八が組んだ三代目瀬川菊之丞演じる嶋のおかんという人物の造型には、本作の翌年上演の同じく金八作『大船盛鰯顔見世』(寛政4年11月、河原崎座)において、四代目岩井半四郎が演じた三日月おせんに通ずる要素が認められる。

(7) 『『けいせい井堤=』考』  
(=は草冠に「瀧」)

三笑が立作者を勤めた、天明7年4月の中村座で上演された『けいせい井堤=』には、抱谷文庫の4冊の台帳が現存する。本台帳の1冊目は、当時三枚目の作者であった勝俵蔵、すなわち後の南北が執筆を担当した部分であり、台帳の形で現在確認できる最も古い南北の作品である。この南北担当箇所には、南北が得意としたおかしみの場面が見られるほか、小道具を伏線として効果的に用いている点において、師の三笑の作風の影響を確認できる。

(8) 『『曾我祭俠競』考』

従来の研究でその存在が知られていなかった、南北作『曾我祭俠競』(文化10年5月、森田座所演)の台帳が、早稲田大学演劇博物館に所蔵されていることが明らかになった。本作は『夏祭浪花鑑』の書き替え狂言であるが、南北が本作以前に手がけた夏祭物である『謎帯一寸徳兵衛』(文化8年7月、市村座所演)が、五代目松本幸四郎演じる大島団七という強烈な悪人を登場させることで、極めて個性的な作品に仕上がっているのに対し、本作は、原作に比較的忠実な穏当なものとなっており、南北の作としては、相対的にやや平凡であるという印象は免れ得ない。しかしながら、18年前の事件の真相の意外性、お仲間という純粋な娘が親殺しを犯そうとする悲劇性には見るべきものがあり、また、後の南北の作品につながる趣向が見られるという点にも注目できる。さらには、書き場の割り振り方や、1年の興行全体を視野に入れた作劇姿勢には、南北の作者としての在り方を見出すことができるのである。

(9) 『『四天王楓江戸粧』考』

番付のカタリは、立作者が台帳執筆以前に作成するものである。南北作『四天王楓江戸粧』(文化元年11月、河原崎座所演)のカタリには、二番目の舞台となる白金に合わせて、近辺の地名を縁語のように散りばめるという技巧を確認できるほか、初代中山富三郎演じるお綱の彫り物という設定や、実際には出演しなかった嵐団八の役割など、台帳では反映

されなかった当初の構想を窺うことができる。また、六建目の「今様の所作事」の場面において、カタリの段階では、初代尾上松助が、琴を演奏するという構想になっているのに対し、烏亭焉馬の担当した台帳では、謡を謡うという趣向に変更されているという点は、本作に焉馬や木村園夫がスケとして参加したことと関連があると推定でき、立作者に昇格してまだ間もない南北が、その意向をスケの作者に徹底させる権威を持ち得ていなかったことの証左と考えられる。カタリの分析は、いまだ作品研究の上で定着していないが、南北を考えるにあたって有効な方法であると言える。

(10) 『『東海道四谷怪談』考』

本稿では、南北作『東海道四谷怪談』(文政8年7月、中村座)の初演時のカタリを中心にしながら、その初期構想について考察を加えた。カタリからは、南北が実録の『四谷雑談』の祝言の場面に基づきつつも、蛇の怪異の連想から、お岩の怪談と小幡小平次の怪談を結びつける構想を持っていたことを指摘した。東海道の四ッ谷を舞台として構想されたであろう、こうした当初の設定は、神田川に戸板に打ち付けられた男女の死骸が流されるという実際の事件をヒントとして、今日見られるような戸板返しの趣向へと変更され、それに伴い、舞台も雑司ヶ谷の四家町へと移されることになったと考えられる。南北は、『四谷怪談』以外にも多くの『忠臣蔵』物の作品を手がけているが、その過程では、上演台帳には反映されなかった構想も多く生まれているはずである。文政9年春に刊行された『四十七手本裏張』には、そうしたボツになったアイデアも含まれていると考えられ、特に同作の小山田直助については、幸四郎の役者絵との関連から、『四谷怪談』における直助のあり得べきもう一つの姿を見ることもできよう。

(11) 「西尾市岩瀬文庫所蔵『柳島浄瑠璃塚奇話』」

西尾市岩瀬文庫所蔵の写本『柳島浄瑠璃塚奇話』(弘化5年(1848)、半化通主人著)は、柳島妙見の初代桜田治助の浄瑠璃塚を舞台にした小説仕立ての作品であるが、実質的には、三代目桜田治助を痛烈に批判した内容となっている。その治助批判に通底する論調は、いかに治助が役者に媚びを売り、虚勢を張った作者であったかということであり、三代目治助を考えるにあたって重要な資料と言える。本書については、旧蔵者の仮名垣魯文が、既に『歌舞伎新報』連載の「狂言作者滑稽伝」という記事において紹介しているが、正確な

翻刻とは言い難く、魯文によって大幅に手が加えられたものとなっている。原本が主眼とする痛烈な批判性が弱められてはいるものの、大立者の役者が絶大な発言力を持つ当時の劇界にあって、治助の役者への胡麻搦りはやむを得ないという趣旨の擁護的な加筆には、魯文の狂言作者観が表れている。なお、本作品については「資料編」において活字翻刻を掲載している。

(12)「歌舞伎役者の墳墓資料」

歌舞伎役者の没年月日や戒名、墓所等を記すという『父の恩』(享保 15 年 (1730) 刊)の趣向は、『古今役者名取艸』(安永 3 年刊)に継承されるが、戯作の流行とともに、物故役者への興味は冥土物の草双紙などの形で表れるようになり、見た目にも面白みに欠ける名鑑の出版は途絶えてしまう。その一方、こうした資料の必要性を感じる好事家達は、自らの欲求を満たすため、独自に墳墓資料を編纂するようになった。老樗軒の『歌舞伎役者墳墓方角附』の墓所による分類方法は、墓巡りを実際に行なう人にとって利便性の高いものとなっている。また、大部の『役者墳墓詣』は、石塚豊芥子の補填を経て関根只誠の手に渡り、その成果は『俳優忌辰録』という出版物として実を結ぶ。近代に入ると、明治 30 年代に東都掃墓会という好事家のグループが、積極的に活動を行なったが、その一員でもある兼子伴雨が旧蔵した西尾市岩瀬文庫蔵の役者墳墓資料からは、趣味を同じくする者同士の交流や友情の一端が窺える。なお、本稿で採り上げた作品の記載情報については、「江戸・明治 歌舞伎役者墳墓一覧」と題して、本成果物の別冊に表の形でまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

光延真哉、『東海道四谷怪談』の初期構想—  
番付のカタリを読む—、日本文学、査読無、  
59 卷 11 号、2010、72—75

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

光延真哉、笠間書院、江戸歌舞伎作者の研究  
金井三笑から鶴屋南北へ、2012、513

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

光延 真哉 (MITSUNOBU SHINYA)

白百合女子大学・文学部・講師

研究者番号：7 0 5 8 6 3 8 8

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし